

全久院報

松本市深志3-7-50 電話 0263-36-3211

大屋根の瓦葺き替え工事 無事完成



檀信徒の皆さまには日頃全久院護持のためにご尽力いただき、心から感謝申し上げます。また、皆さまのご協力を持ちまして、5月上旬に大屋根瓦葺き替え、庫裡台所改装、本堂トイレ改修工事が完成いたしました。

台所改装工事の最中、東日本大震災が発災し材料が入らなくなり、一時工事が止まるハプニングもありました。大屋根は昨年11月に完成していましたので多くの皆様はすでにご覧になり、「きれいになった」「立派になった」などの言葉をかけていただきました。また本堂のトイレも昨年末には工事が終わり、皆様に使っていただいております。やはり「使いやすくなった」「きれいになった」と好評で

す。また台所は6月現在、皆様に使っていただきながら、食器を運び込んでおります。食器は今まで台所の棚や、あちこちの押入れに仕舞い分けていたので使いにくかったのですが、収納を増やして台所一箇所にまとめることができるようになり、機能的に台所仕事が進むようになりました。葬儀や法事などでどんどん使っていただきたいと思っております。

なお、会計は最終集計を後日皆様にお知らせしますが、大工・瓦工事で4900万円、垣根工事で100万円、台所家具で250万円、皆様への工事完成記念品で200万円、まだ最終請求が来ていない時点で5500万円ほどの支出が見込まれています。入金は5月末現在で4500万円。1000万円足りない状態です。約600軒の方々



より寄付をいただいておりますが、まだ150軒の皆様から寄付を頂戴しておりません。不足分は宗教法人と、護持会の積立金を当てていただいておりますが、まだ寄付をいただいていない皆様へは、後日再度お願い文をお届けします。経済情勢が劣悪の中皆様にお願ひしますこと大変心苦しく思いますが、ご無理のないところでぜひご協力お願いしたいと存じます。

なお、工事期間は本堂の瓦葺き替え工事は平成22年5月から始まり23年3月で終了。本



堂トイレは平成22年9月に始まり11月完成。庫裡台所は平成22年11月に始まり23年3月に完成しました。

再度のお願いですが、寄付がこれからの皆様

- ・一口 25000円で、1軒につき三口をめどにお願いします。

申込みは 先にお配りした申込み用紙を郵送かファックスで全久院へお送りください。お手元がない方は郵送しますのでお申し出ください。
送り先住所 〒390-0815 松本市深志3-7-50
ファックス 0263-34-4300 (電話 0263-36-3211)

寄付の払込みについて

払込み期間 随時（檀家様のご希望、ご相談ください）
払込み方法 1、全額 一括払い
2、分割 複数の払込み回数可能（檀家様のご希望、ご相談ください）
3、払込み 現金書留 か 全久院へ持参
払込み用紙 ゆうちょ銀行 払込み口座（払込み用紙がお手元がない方はご連絡ください。郵送いたします。）

檀信徒の皆様が心安く集えるお寺にしたいと考えております。どうぞ理解いただき、ご協力のほどよろしく願いいたします。

お盆参りのお知らせ

お盆のお参りの予定を次の表にしましたのでご覧ください。本山修行中の長男、俊浩も棚経に回ります。後のコーナーで紹介しますが現在堂行（どうあん）という係りを本山で務めています。お経を唱え始める重要な役です。もう堂行になって1年になりますので、お経の声や読み方は益々磨きがかかってきています。「住職より上手だ」とおっしゃる方もいて、うれしいやら・・・複雑な思いです。

本年は住職と回る軒数が逆転し俊浩の件数が多くなります。このコースを覚えてもらい、2～3年したら回るコースを入れ替えますので、俊浩が全部の檀家様のお宅を覚えることになります。今年の予定は下記の表のとおりです。従来の周り順と多少変更があります。

8月	住職の回る範囲	俊浩の回る範囲
9日	新盆のお宅	
10日	安曇、明科、麻績など超遠方	
11日	並柳、寿、塩尻、村井、平田、など市外南部	笹部、征矢野、南原、石芝、二子、神林、笹賀
12日	筑摩、惣社、山辺、横田、岡田、沢村など市外北部	石芝、高宮、南松本、荒井、新村、波田、桐、沢村、蟻ヶ崎、城山など市外北部
13日	源地、日ノ出町、県、清水、女鳥羽、下横田など市内北東部	宮村、埋橋、庄内、東中条、豊田町、など市内南部
14日	横田、旭町、浅間、北深志、沢村、田町上土、大手、丸の内、など市内北西部	南新町、井川城、鎌田、本庄、博労町、天神、宮村、中町、小池町、飯田町、本町
15日	城西、城山、新橋、島内、蛇原、留守だったお宅、	白板、渚、巾上、伊勢町、国分町、留守だったお宅
16日	留守だったお宅	

お盆前の作業と懇親会にどうぞ



本年も、お盆が始まるにあたり、山門の掃除、

お墓の掃除や、窓拭きをしていただき、その後懇親会を催したいと思います。毎回参加していただく常連さんもできました。

写真は、本堂奥の間の窓拭きと、よ〜く冷えた・・・でいっぱい飲んで、食べる懇親会の様子です。



7月23日（土）15時全久院の庭に集合、掃除（お墓の清掃・窓拭き・山門二階の拭き掃除など）17時より夕食を兼ねた懇親会

作業のできる服装でお越しください。汗をかきながらの作業や懇親ですので、堅苦しくないお寺の一面もわかっていただけるかと思えます。参加希望の方は食事の都合がありますので、電話にてお申し込みください。

盆棚の飾り方

1、棚を作る場合

上の段に本尊様、（本尊様は仏壇に入れてお盆中は閉じておくというお宅もあります。その家のやり方を尊重してください）お位牌、塔婆を奉る。2段目に供物やお膳、水やお茶。3段目に過去帳、花、燭台、線香立て、鐘、マッチや火消しや線香入れなどの道具をおきます。棚の数が多いお宅は上の写真のように各棚に分けてお供えください。



2、仏壇を使う場合

仏壇は常のとおり奉る。手前に経机を出すお宅は机の上に、経机を出さず引き棚を使うお宅はその上に棚の3段目に飾る過去帳や花や鐘などを飾る。その他灯籠や飾り花、いただいた供物などは写真のとおり適所に飾る。またお寺が配る五色の盆旗は、写真のように広げて糸などを通して吊るか、棚に広げて置いてください。



初めにも書きましたが、こうでなくてはいけない、ということはありません。先祖様をお迎えするという気持ちをこめて、その家に伝わった仕方で飾っていただくのが大切なことと思います。

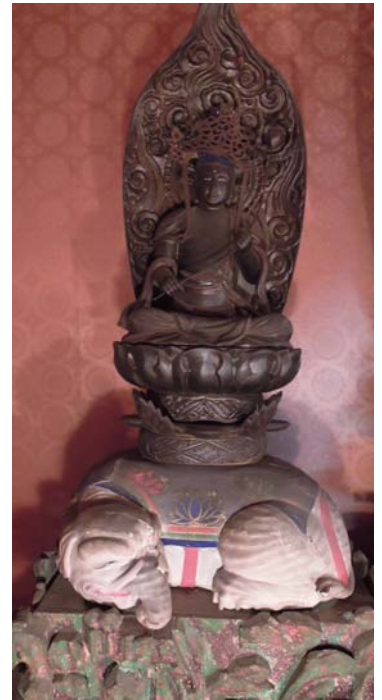
境内散歩 - 普賢菩薩さま -

全久院の本尊様はお釈迦様で、両脇に普賢様と文殊様を従える三尊佛となっています。今回はその普賢様

をご紹介します。

普賢菩薩はサンスクリット語（古代インド語）では「サンマンダバツダラ」。サンマンダは「あまねく、行き渡る」、バツダラは「もっとも賢い、吉祥、めでたい」という意味から中国や日本では「普賢」と呼ばれました。つまり吉祥が四方八方に行き渡り、あらゆるご利益をもたらす菩薩として信仰されました。また智慧を司る文殊様に対して、理性と慈悲で修行を司る普賢様として位置づけられたのです。智慧と行が具わることにより完全な悟りに至るという仏教の教え、それが三尊佛となったのです。

普賢様の乗る白象は偉大な力の持ち主を象徴しており、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六つの行い、つまり他に施し、おきてを守り、自分がという我欲を我慢し、努力し、心を鎮め、悟りを得ることを人に勧める役割を果たしています。ただ白象に乗っているのではなく、象にも意味があり仏様の役割を担って、普賢様の役割を支えています。形の中にこめられている意味を探ってゆく作業も楽しいものですね。



普賢信仰はインドや中央アジアで始まり、中国敦煌の石窟には唐初期の壁画として描かれています。日本では法華経の教えにあるように、法隆寺上堂の釈迦三尊像の普賢菩薩は方座に座って両手で如意を持っていますが、金堂の壁画に描かれた普賢菩薩は（日本最古の普賢様）白象にのって合掌する、などさまざまな形をしています。しかし奈良時代後期になると普賢様の仏像は作られなくなりました。法華経の信仰が衰退していた時期に当たります。その時代に何が流行を作り出していたかは、その当時の文化を調べるとわかってしまいます。私たちは後世の人からどんな目で見られるのでしょうか？どんちゃん騒ぎする文化も必要かもしれませんが、きちっとした信念や信仰に根ざした文化、先祖から後世に卓越した技や心を伝承する文化を築いておかなければ、と思いますが・・・

弘法大師のころ始まった信仰が平安時代中ごろには天皇の守護本尊となり、延命祈願が盛んに行われました。きっと天皇の好みも反映されて姿が変わっていったと思われます。仏像もその時代、社会、人々の思いや願いによって形を変えていったのだと思います。一人々が時代に密着し、歴史の中から新たな意味を見つけ出し、文化を創造し、信仰を深め、人として心に豊かさを蓄積させていた時代だと思います。物の蓄積ばかりを豊かさとする現代との違いがわかりますね。

「お経」というと漢字ばかりで難しいと思って、内容を知りたい、なんて思えなくなってしまうのですが、どんな仏様がどんな教えを説き、どんな功德があるか書かれているのです。有名な話ですが、「東海道五十三次」は華嚴経の教えです。「華嚴経の入法界品（にゅうほっかいぼん）」では長者の息子、善財童子が仏道を求めて文殊菩薩を尋ね、53人の師を紹介されました。それぞれの師から教えを受けながら、最後にたどり着いたのが、その53番目の師、普賢菩薩だったのです。

また「法華経の普賢勧発品（ふげんかんほつぼん）」では法華経の修行を勧めており、法華経を信仰する人の前に白象に乗った普賢菩薩が現れ、その人を守護しご利益をもたらすと説かれてい

ます。とくに法華経は女性も成仏できると説いた初めてのお経で、普賢菩薩も法華経のなかで女性の成仏を説いたので女性に信仰を広めたのです。また、元来女性であったものが成仏して男性になったとも言われ、女性的な感じのする仏様として広まりました。貴族文化の広まった平安時代には美しい菩薩像が作られました。特に美しい十羅刹女（じゅうらせつにょ）を従えた普賢様が雲に乗って飛来する仏画が好まれました。その時代が表現されたのが文化だと益々感じます。

また、密教では普賢菩薩の悟りを求める心が金剛不壊、最高のもので絶対壊れないから金剛界曼荼羅の中心的な菩薩、金剛薩埵と同一視され、また、胎蔵界曼荼羅では弥勒、観音、文殊、とともに四菩薩として描かれています。ですから文殊菩薩とともに奉られる釈迦三尊像は密教に基づく教えを表していることになります。このことは私にとっても新しい発見でした。手には慈悲を表す蓮を持ったり、悟りを求める心が固いことを示す剣を持ったりしています。右の普賢像は東京国立博物館（平安時代）のもので



漠然と仏様を拝むのではなく、手の持ち物一つにもその背後のお経や、製作者の願いや考えで意味づけられているところを味わうのも一興かと思えます。民族や歴史や社会の中で普賢様も姿を変え信仰を集めてきました。私たちも現代をどんな形にして後世に伝えるのか真剣に考えねばなりませんね。

仏教ミニ知識

前号から引き続き、達磨大師のお話をします。しかし、達磨様は歴史上の事実として残したものは大変少なく、言い伝えをまとめたものが残っているだけということをお頭の隅に置いておいてお読みください。

達磨様は梁の国、武帝の時代、520年9月21日に広州の港に着いたといわれています。インドの高僧が着いたと聞いた武帝は11月1日金陵の都に迎えました。ここであまりにも有名な問答が交わされました。ぜひ覚えておいてください。多くの仏教寺院を建立するなど仏教への信仰が篤かった武帝は「私は仏教に帰依しできる限りの奉仕をしてきました。寺院を建立し、民衆に仏教信仰を説き、僧侶に供養し、自らも修行しました。この善行に対しどんな功德がありますか？」達磨曰く「無功德（功德なんか無い）」と突っぱねました。納得できない武帝は「これだけの善行を積んでいるのに、なぜ功德が無いのですか？理由をお聞かせください」その答えは「人間のちっぽけな頭で考えることは欲や執着が絡んでいる。そんなものに功德があろうはずが無い」「では、真の功德とは何ですか」達磨曰く「浄智は妙円にして 体 自ずから空寂です。執着から離れた浄智の眼を開けばご利益なんかに縛られない本物に気付くでしょう」武帝は今までの自分を否定されわけがわからなくなり「如何なるか、これ聖諦第一義（仏法の第一義とするところはなんでしょうか?）」と聞くと、達磨は「廓然無聖（かくねんむしょう、からっとしていること）」と答えました。早く人間の小さかしい執着心から離れて、青空のようからっとしなさい、と伝えたのですが、益々意味がわからなくなった武帝は「朕に対する者は誰そ



（私の目の前のあなたは私の問いに答えていない、仏教の教えを本当に知っているのか？何を修行したというのか？いったいあなたは誰なんだ？）と聞くと、達磨大師は「不識」と答え、揚子江を渡り少林寺へ引き籠もり、座禅に明け暮れた。という禅問答の中でも有名なものの一つです。

「あなたみたいに修行ができてないものには識（理解すること）はできませんよ」という意味で「不識」と言っただけではないと考えます。達磨さんは徹底的に優しく、最後まで第一義を語っていました。「不識」人間のちっちゃな頭で識別できないもの、それが「聖諦第一義」ですよと。

「無功德、聖諦第一義、朕ニ対スル者ハ誰ソ、不識」など禅語といわれると必ず引き合いに出される言葉が並んでいます。前頁の達磨像は一休さんが一言賛を書き付けた有名な画像です。言葉に囚われない、生き方としての禅を貫いた気迫が噴出してくるような達磨大師ですね。武帝に愛想を尽かし、少林寺に向かうため揚子江を小船で渡って行く達磨さんを、小船を芦の葉に譬え「芦葉の達磨」としてまた絵が残っています。一つの行動、一つの言葉がみな仏法を説き尽くしているのが達磨さんなのでしょう。

花祭り - 松本仏教和合会 - 気仙沼への震災炊き出し

お花祭りは松本
仏教和合会主催で毎

年5月第三日曜日に開催されます。私は総務部長を務めており、広沢寺小笠原住職が会長です。会長はじめ会員の思いを集約して、今年は3月の東日本大震災の発災に対応して、お祭りの部分を縮小し、できる限りの救援金を送ろうと計画を変更しました。その一環として、皆様からいただいた浄財を使わせていただき、気仙沼市に炊き出しに行ってきました。

以前より私が所属していた SVA（シャンティ国際ボランティア会）は外務省の認可を受け、公益法人格を取得しました。今回の震災に対して、緊急援助団体に登録され、気仙沼市と同社協と共同してボランティアセンター（下の写真）を立ち上げました。この SVA から情報をもらい、5月10日11日の夕食160人と60人分の炊き出しをしてきました。



10日朝5時に2台のワゴンに炊き出しの道具や食材や寝袋など身の回りの荷物を積んで、10時間かけて気仙沼に到着。左写真の SVA 気仙沼事務所のスタッフに案内されて、気仙沼市本吉地区小原木中学校に到着。3時より早速酢豚弁当160人分を作り始めました。昼間は学校や仕事、瓦礫の片付けなどで避難所には誰もいなくなるため、夕食だけの炊き出しです。ト

ン汁やカレーは毎日出されるので違うものを作って欲しいとの前もっての情報も入り、松本調理師会の皆さんに協力いただいて、食材を直接市場から購入しました。松本中の皆さんが自分も何かしたいという気持ちが強く、さまざまな団体や個人が連携して被災された方のお役に立てればと思います。ちょうど5時に夕食の配膳ができると、女性や子供さんたちが体育館へ弁当を運んでくれました。すでに非難して2ヶ月、避難者みなで



生活の役割を分担するため班に分かれていて、掃除や身の回りの世話、食事の準備などを担当するそうです。今日は食事を作らなくていいので、身の回りの仕事を片付けられ、食事とともに感謝されました。宿泊はSVAの関係で岩手県一関市の長泉寺に宿泊できました。気仙沼から40キロ離れており、夜は街路灯も消えており、瓦礫をどかしただけの道や、応急修理した道を、海岸に出たり河川敷に入ったりしながら、道なき道を1時間半かけてたどり着きました。



11日も午後3時からの準備のため、それまでSVAの専務理事瑞松寺茅野副住職に案内してもらいました。身寄りが無かったり、身元がわからない遺骨を一時預かっている普門寺、避難所にもなっている火葬場、避難所になっている老人福祉センターや浄土宗の寺（左の写真）などを案内してもらいました。マスコミにはなかなか仏教団体がどんな活動をしているか紹介されませんが、多くの寺が被災民と向き合い、自分のところも被災している

のかかわらずさまざまな活動をしているのをぜひ皆様に知っていただきたいと思います。またこの紙面では書ききれないさまざまな情報を聞きました。岩手県は瓦礫を撤去してから、分別処理をするため、陸前高田市は瓦礫の撤去が進んでいましたが、宮城県は瓦礫をその場で分別してからの撤去ということで気仙沼市内はまだ瓦礫がそのまま残っていました。行政の対応一つでさまざまな難しい問題が噴出してきます。

3時から唐桑体育館で60人分の炊き出しをしました。中華どんぶりが今日のメニューですが、作っている最中何人かのお母さんが感謝の



声をかけてくれ、同行した3人の女性メンバーが余りに優しい声かけに、感極まって泣き出すハプニングもありました。私たちが励ましに行ったはずなのに。この体育館には同じ村の生き残った全員が避難していました。食事が終わって自性院鳥羽住職のミニコンサートが始まりました。見も知らない人が歌っても、「早く寝かせてくれ」が関の山かと思いながらでした。が、写真をとる人、タンバリンやマラカスを配る人、自分の布団のシーツをはずして、鳥の羽のようにして踊る人、あまりの人の心の温かさに私たちが泣き始めたのです。「頑張れ！」と声をかけられたのは私たちでした。生死の境を乗り越え、不自由な共同生活を強いられている人々の強さ、深さ、やさしさを痛感しました。

私がカンボジアの難民キャンプで活動し始めた時、組織が小さくて法人格も無く、何もさせてもらえなかったSVA。現在は公益法人として国内では3本の指に入る民間団体と評価されるようになりました。このSVAを基盤にして何度か被災地で活動させてもらいな



がら、自分を鍛えてゆこうと考えています。SVA の事務所では、上の写真の真ん中にしゃがんでいる浅田君に会いました。30年前難民キャンプで図書館を作っていた学生が、会社から長期の休暇をとってSVA事務所の運営に参加してくれたのです。自分も若いころの情熱を絶やさぬこと無く支援を続けたいと思っています。

茶道コーナー

即中齋三十三回忌追悼茶会

右の写真は千利休の墓です。場所は京都大徳寺塔頭の聚光院です。以前はいつでも扉が開いてお参りできたのですが、最近では扉が閉まって中へ入れませんでした。即中齋三十三回忌の法要にあたり特別に開放しており、お参りできました。即中齋は表千家13代目の家元です。現在の家元は而妙齋ですので、その父に当たります。その即中齋家元宗匠の追悼の茶会が6月8日、大徳寺塔頭聚光院、総見院、玉林院で行われたのです。



即中齋宗匠は昭和45年に完成した全久院の茶室開きに来ていただいています。右下の写真の中央で茶碗をもたれている方で、右隣は若き而妙齋家元宗匠、その隣はお亡くなりになった久田宗匠です。父は即中齋の正面に座っています。即中齋は気安く日本中を駆け回り、表千家茶道の今日の基礎を築かれました。会員を組織し「表千家同門会」とし、各県に支部を作り県単位で研修会や総会を開催させるなど、稽古をする者同士の裾野を広げ交流を深めたのです。父とも大変懇意につき合わせていただき、酒の強い和尚の名を京都にまで轟かせていました。現在私が家元にお会いしても、「酒の強い信州の和尚の息子も飲めるんだね」と声をかけてくれます。酒でなくお茶と言っていたいただきたいのですが・・・まあ、親の七光りというところでしょうか。全久院にとっても表千家の長野県での看板を確固たるものにしていただいたのも即中齋宗匠のおかげかと思えます。



今回の追悼茶会にて私も大変よい経験をさせていただきました。右下の写真の中央は14代楽吉左衛門です。上田市の村田先生（左の方）に紹介していただきました。千家の道具を作られる十職の皆さんによる総見院の席で、私たち客の案内をされていました。案内の合間には静かに座られ「碧岩録」という臨済宗の禅のテキストに当たる難解な本を読んでおられましたが、村田先生が声をかけると気さくに話しを始められました。私の質問に「黒楽を焼く温度を測るということは楽ではしませんが、熱気のゆれ具合、土の赤くなり加減など、経験からすると1200度く



らいで焼いており、赤楽は1000度を切るくらいの温度で焼いています。みな職人として体で伝えてきた技術です」と答えてくださいました。眼が大変穏やかな輝きをたたえていましたが、その底の眼光の厳しさはすさまじいものがありました。「楽」の看板を支える業と人格を備えた方で、こんな方が日本にはまだいるか

と思うと、ほんと安堵したものです。合間合間に本を読む姿は、極めつくすことの無い高みを、ひたすら敬謙に目指す美しさをたたえていました。自分も人目ばかり気にして何もしていないでいるんじゃないで、自分を素直に出していいんだ、とほんとさせていただきました。

葬儀や法事に全久院をご利用ください！

ここ数年リラの会の立ち上げから始まり、法要でもっとお寺を使ってもらえるように皆さまに勧めて来ました。また、本年はトイレや台所も整い、檀信徒の皆様に使っていただける環境が整ってきました。おかげさまで、ここ2～3年葬儀は全体の3分の1ほどお寺を式場にしてもらえるようになりました。9年前はお寺での葬儀はまったくありませんでしたので、皆様にも理解いただけるようになってきたかと思えます。確かに最新の設備を備えた業者の式場は設備も整い、便利ですが、その分費用はビックリするものです。

比較してみますと100人のお参りの人と仮定すると、ご遺体の自宅への搬送から始まる全ての費用は、業者では、100人×25000円＝250万円。寺を使えば100人×10000円＝100万円。差し引き150万円の差が出ます。寺

「寺を使うと人手がかかり大変ではないのですか？」と聞かれるのですが、まったくご心配は要りません。ヒラバヤシ式典部（電話32-8700）かメモリアルライフ信州（電話40-7745）へ電話するだけです。後の手続きはみな業者がやってくれます。

「積立金があります」と言われますが、それが30万円としても、捨ててしまってもまだ、120万円浮いてきますし、法事などで使うこともできます。

葬儀や法事は宗教的な儀式ですから、寺という場所でなければ、その儀式を行う意味が薄れてしまいます。戒律を授かり、菩提寺の住職に戒名を付けていただき、心一つになった方々に送られて仏様になる、という葬儀の意味はやはり自宅や寺という場所でなければなりません。様々な事情で仕方がない場合もありますが、是非経済的にもお寺を使っていたきたいと思えます。イスに坐っていただけるよう、駐車場の確保、など以前よりは便利になってきていますし、もっと皆さんが使いやすいように改善してゆきますので、是非一考ください。いざという時では業者の言うなりになってしまいます。自分の葬儀の仕方を住職と相談しておくことをお勧めします。葬儀の後請求書を見て子孫をビックリさせるようなことだけはしないでいただきたいと思えます。

俊浩 修行奮闘記

俊浩の修行は5年目に入りました。現在、堂行（どうあん）寮に配属され、本堂での法要のお経を先導する役を勤めています。本堂で法要の準備をし道具を出す係り、導師の補佐をする係りなど勤め、法要全体の動きを体で覚え、お経を覚えて、最後に任される役が堂行です。全ての儀式の動きを把握しながら、法要の先導をしてゆきます。檀信徒の皆様に見ていただけるよう2月ビデオを撮りに行った時の写真です。右の写真は回向双紙を手に、みなでお唱えしたお経の回向をお唱えしているところです。下は見台に乗せられ運び出された法要の供養者の名前を読み上げているところです。お経の先導をするためには、声の出し方や回向の唱え方などを、あらゆる修行の指導をし、法要を司り、特にお経を唱える指導に当たる維那（いのう）和尚さんから習います。その



後許可されてこの役につくわけです。俊浩は堂行寮に配属されて4期目で1年になります。声や所作など鍛えられ、堂々とお唱えしていました。彼の声は高音で澄んでいます。本山では高音で



お経を読み始めても、修行僧たちは自分に合った音で低く声を出します。それが響きになって本堂中が振動する状態になります。その振動を引き出すのが役目ですから、自分も大きな声を振り絞ってがなりたてるのではなく、身体をバイオリンなどの楽器のように共鳴箱にして振動を回りの修行僧に伝播させてゆくのが、彼の本当の技になります。音程を調節して、皆が出している音を聞き、みな

の響きが一番よい状態に先導してゆくのが彼の役割ということになります。

その役を見事に務めていると、親ばかかもしれません。しかし自分が優れているのではなく、全久院の歴史の中で健康な身体をいただき、修行に耐える体力と気力をいただき、皆さんに育てていただいているからできることと思います。檀信徒の皆様から「息子さんはいつ寺に戻るのか？」とよく聞かれますが、そのことを忘れて、「後輩たちをあごで使うような思い上がりが出るようならすぐにでも降りて来い」と伝えてあります。本山でもすでに古株と言われる位置に来ています。後輩は自分の言うとおりになります。自分をしっかり持っていないと修行ではなくなってしまいます。朝のお勤めの後本堂の一角に堂行寮が集まり朝課の反省をしていました。自惚れることなく後輩たちと写真のような清々とした笑顔でいられる間は修行が進んでいると思いました。



大黒コーナー … オペラ 蝶々夫人公演 …

5月8日、松本市民芸術館主ホールにて、オペラを楽しむ会



主催によるプッチーニ作「蝶々夫人」が公演されました。「蝶々夫人」は長崎を舞台にアメリカ海軍士官ピンカートンとのせつなく、どうにも救いようのない悲恋を描いたオペラの傑作です。公演二ヶ月前現金化されチケットは500枚。本当にお客さんは入るのか不安を抱えての当日、1000人を超える聴衆を迎えることができ、公演は大成功でした。

平成21年倉科京子リサイタル「音の宴」公演の直後、次の公演の演目として「蝶々夫人」が決まり、日ごろ指導を受けているリリカ・イタリアーナの澤木先生から音楽指導を受け、構想を練り始めました。平成22年4月より具体的な日程や会場を決め、練習計画を練り、練習を開始しました。

以来、舞台の大道具、照明、音響など JUKE の上條社長と詳細な打ち合わせをしました。打ち合わせの中で上條社長より字幕を背景の中に入れて映し出せば、ステージの左右に出ず電光掲示板より聴衆の視線をステージにそのまま集められる、など多くのアイデアが出されました。本当に



助けていただきました。また本当に多くの方々の協力をいただきました。着物を貸していただいたり、着付けをお手伝いいただいたり、お化粧や日本髪に手を貸していただいたり、障子が開け閉めできるように細工していただいたり、桜を満開にいただいたり、練習のピアノ伴奏をしていただいたり、合唱の助っ人、照明のキュー出し、沢木先生より紹介いただいた中津留さんには演出の補助をしていただいたり、楽屋でのお弁当などの片付けをしていただいたり、みなさんの力がなければこれほどのステージを

創り上げることはできませんでした。

また、後援をいただいた松本市をはじめ行政団体や企業の皆様、特に芸文協会長の有賀正様には多大なるご支援をいただきました。また、50を超える個人や団体に広告、協賛を受けていただきました。繰り返しますが多くの皆さんの手でこれだけの公演ができたものと心から感謝しています。一人では何もできません。

二幕が終わった幕間に、帰ろうとされたご婦人が一言「蝶々夫人の気高い心がこれから悲劇に向かっていきます。これ以上は悲しくて聴いていくことができません。最後まで聴きたいのですが・・・」オペラは正確な音楽性や技術や声量、照明や舞台だけをひけらかすものではありません。それらを基礎に作者の伝えたかった哲学や心を聴衆にどのように伝えることができたかが、オペラの醍醐味だと思います。今回は県内に住むオペラを愛する者が集まり、自分達の技術と情



熱の全てを出しきったステージを創りたいという熱意が伝わり、音楽性ばかりでなく心を届けることができたと確信しております。次回はさらに稽古を積み技術を磨き、表現力を深め一ランク上の公演を目指しますので、一層のご協力をお願いし、今回の公演に際してのご後援、ご協力に感謝申し上げます。有難うございました。

掲示板 (皆様のご参加お待ちしております)

～施食会～

8月5日(金) 12時より自家製によるお弁当、12時半より観音講の皆さんと一緒に懐かしい唱歌の合唱、13時よりお話、14時より法要(ご詠歌の会の皆様による奉詠)、15時よりお塔婆を配ります。今年も皆さんにお参りいただけるような内容を考えています。ぜひご参加ください。



．．． 檀信徒作業と懇親会 ．．．

例年通り7月24日(土) 3時より全久院で開催します。3時よりお墓の清掃、窓拭き、山門の掃除をしていただきます。5時より懇親会となります。屋外でのバーベキューと冷たい生ビールという趣向です。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は電話でご連絡ください。



．．． 座禅会 ．．．

9月3日(土)・9月24日(土)・10月22日(土)・11月29日(土)・12月17日(土)

お粥と精進料理。以上が下半期の日程です。毎回夕方4時集合4時40分まで青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、5時45分頃まで座禅、6時まで茶話会という予定で行います。12月18日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただくだけでなく、ものの見方や生き方を豊かにすることができます。ぜひご参加ください。

．．． ご詠歌会 ．．．

9月15日(木)・10月13日(木)・11月10日(木)・12月8日(木)

午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。一緒にいかがですか。

．．． 観音講 ．．．

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱11時20分より食事という日程です。現在15人ほどの参加者があります。気よりが良く60代から90代の方が元気に集まってきます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。

お知らせ

．．． ホームページを開設しました ．．．

<http://zenkyuin.or.jp/>

全久院の催しに参加する若い方から、「全久院報を配っているようだけど、すぐ仏壇に上げられてしまうようで見たことがない。若い人にはコンピュータのほうが身近だからホームページにしてくれないか」との要望がありました。全久院報も全久院を知っていただけるようさまざまなコーナーを作ったので、それをそのままホームページようにすることが出来るとのことで、コンピュータ管理をしてくれている檀家の丸山耕一さんに依頼して解説していただきました。将来は皆様と意見や情報を交換できる場に育てて生きたいと思います。ぜひ一度開いて見てください。